

浦上川の河川改修の歴史に関する調査

高橋 和雄

長崎大学大学院工学研究科 インフラ長寿命化センター

1. まえがき

1982年長崎豪雨災害から30年以上が経過して、甚大な被害を受けた長崎市内でも災害体験が風化しつつある。災害伝承をするために、長崎県防災基本条例の制定による長崎県防災月間(7月)の関連行事の開催、災害のアーカイブの作成、災害遺構の掘り起し等がなされてきた。直轄河川とは異なって県管理の河川については河川の歴史等が知られていないことが、市民が川に関心を持っていない一因となっていることが想定される。そこで、本報告では長崎市を流れる浦上川の河川改修の歴史をまとめた結果を報告する。

2. 浦上川の概要

浦上川は諫早市多良見町に近い長崎市畔別当付近の標高336mの前岳にその源流を発し、国道34号バイパス沿いに西に流れ、三川川と大井手川と合流して、浦上地区の市街地に流入する。その後、城山川や下の川を合わせて、市街地を貫流して長崎港に注ぐ流域面積38.6km²、延長13.3kmの二級河川である。長崎市街地を流れる河川としては、流域面積や流路延長とも大きく、縦断勾配も比較的緩やかな都市河川である。浦上川流域は長崎市の副都心的な性格を持ち、社会・経済の基盤となっているほか、中流域左岸には原爆爆心地、平和公園、浦上天主堂等があり、長崎の平和のシンボルになっている。

3. 浦上川流域の歴史

長崎港の入り江が深く湾入していたので深江浦と呼ばれ、その浦の上にあるので、浦上という名称になったといわれている。浦上地区は有馬領になっていたが、1584(天正12)年に有馬晴信がイエズス会の知行地として寄進した。伴天連追放令発布後の1600(慶長5)年に天領になり、さらに、1605(慶長10)年に浦上諸村は天領と大村藩に分割され、浦上川流域は天領に含まれた。左岸側は浦上村山里、右岸側は浦上村淵とされた。山里の高台に浦上街道が西坂町まで至っていた。深江浦は現在の浜口町あたりまで入り込み、現在のJR九州の浦上駅と長崎駅は海の中であった。イエズス会の知行地になった長崎では、どこでもこの時代以前の記録が失われ、歴史が断片的にしか

表-1 浦上川の河川改修等の歴史

年	出来事
1730(享保3)年	浦上新田の造成工事(茂里町から浜口町まで)
1882(明治15)年～	第1次長崎港湾改良事業
1889(明治22)年	
1886(明治19)年	長崎港維持のために、土砂留工事
1897(明治30)年	長崎港維持のために、土砂留工事
1897(明治30)年～	第2次長崎港湾改良事業(浦上新田から大黒町まで埋立て)
1904(明治37)年	
1922(大正11)年～	浦上川流域で水害多発
1928(昭和3)年	
1928(昭和3)年～	浦上川第1期改修工事(長崎市事業主体)
1931(昭和6)年	浦上川が準用河川に指定(二級河川、県管理に)
1932(昭和7)年～	浦上川第2期改修工事(長崎県事業主体)
1934(昭和9)年	
1982(昭和57)年	1982年長崎豪雨災害、激甚災害対策特別緊急事業と災害復旧助成事業による主として河道掘削、浦上ダム(緊急治水ダム事業)
1991(昭和63)年～	ふるさとの川モデル事業整備計画の河川に指定
2012(平成14)年	長崎水害緊急ダム事業の浦上ダムの検診、継続に

残されていない。浦上地区では農業と漁業で生計を立てていたが、当地区には平地が少なく、田畑は狭く生活は苦しかったようである。1804(文化 4)年から幕末まで山里と淵の庄屋は連名で年 2 回長崎代官所に極貧御救米による生活支援の嘆願を提出し、長崎代官所から長崎奉行に上申され、認められていた。産業では山里では榎の実、山里の河口部と淵では白魚であったとされている¹⁾。

1889(明治 22)年に長崎市制が施行され、1898(明治 31)年に西彼杵郡浦上山里村の一部と浦上淵村が長崎市と合併し、1922(大正 10)年に残りの浦上山里村が長崎市と合併した¹⁾。1945(昭和 20)年 8 月の原爆の投下によって、浦上地区は甚大な被害を受けた。

4. 浦上川の歴史

浦上川にかかわる歴史を長崎市史、長崎県議会史等によってまとめると、表-1 の結果となる。浦上川の名称がいつから使用されだしたかは不明である。江戸時代の水害の記録は御用留に散見されるが、川の名称が確認できるのは、1860 年(万延元)年 5 月末の豪雨での浦上村淵の庄屋志賀による長崎代官所への被害届には大川から御用木や橋の木材が流れてきたとする記述がある。御用留によれば江戸時代の末期に浦上川流域で水害が度々発生し、井堰や木橋が流され、流されにくい構造への復旧への要望が地元からなされている。1886(明治 19)年の第 1 次長崎港湾改良事業による河川の土砂留工事では滑石川(現在の大井手川、支川)の名前が使用されている¹⁾。長崎港に土砂堆積が進み、港湾機能を維持するための工事の一環であった。

(1) 浦上下流域の埋め立て 浦上の地区の埋め立ては、1730(享保 15)年から始まった浦上新田の造成工事で、現在の浜口町から岩川町、銭座町辺りまで埋め立てられた。この新田は湿田で南端に近いところは、蓮畑であったといわれている。明治に入ると 1897(明治 30)年から 1904(明治 37)年にかけての第 2 次長崎港湾改良事業で浦上新田から大黒町まで埋め立てられ、現在の浦上川下流域の河川形状が確定した¹⁾。

(2) 水害頻発と河川改修 浦上地区の開墾が進み、市街化が進んでくると、浦上川流域で水害が表-2 のように頻発しだした²⁾。特に、新しく埋め立てられた市街地での浸水被害が目立つ。1927(昭和 2)年の水害の被害額は約 360 万円に達し、1926 年度の歳出決算額 226 万円の 1.6 倍に達した。長崎県議会史³⁾によれば長崎市議会は浦上川改修にかかわる 5 箇年継続事業計画を表-3 のように議決した。

表-2 浦上川流域の風水害の記録

発生年月日	原因	被害内容
1922(大正 11)年 9 月 5,6 日	豪雨	市北部方面の被害が多く、茂里町 104 戸、目覚町 175 戸、岩川町約 200 戸浸水。岩川町付近では電車線路上水深約 60cm。市北部方面に 1,500 人分の炊き出し
1923(大正 12)年 7 月 4 日	豪雨	長崎市北部方面で浸水家屋 200 戸以上
1926(大正 15)年 7 月 6 日	豪雨	市北部の岩川町、目覚町、茂里町、坂本町、浜口町、松山町などに浸水家屋 553 戸
1927(昭和 2)年 9 月 12 日	暴風雨	満潮と重なり、市北部方面の浸水がはなはだしく、茂里町付近では水深胸に達して住民は 2 階に避難。岩川町、目覚町方面は団平船で交通するほど。浸水家屋 1,523 戸に上り、死者 1 人、全壊家屋 178 戸、流失家屋 13 戸など。国有鉄道長崎本線大橋鉄橋が破壊して列車運行不能。市は 13,14 日に炊き出しを実施
1928(昭和 3)年 6 月 26 日	暴風雨	市北部方面で浸水し、床上浸水 450 戸、床下浸水 1,254 戸、全壊家屋 4 戸、半壊家屋 7 戸、死者 1 人
1931(昭和 6)年 7 月 12 日	豪雨	浦上川の改修の結果、市北部方面の水害なし

表-3 浦上川の河川改修に係る経過

年 月	内 容
1928(昭和 3)年 2 月	長崎市議会は浦上川改修に係る長崎市の 5 ヶ年継続事業計画を議決
1928(昭和 3)年 2 月	長崎市議会は長崎県知事に「浦上川を県支弁編入に関する意見書」を進達
1928(昭和 3)年 12 月	長崎県議会へ「浦上川を準用河川に認定」の建議提出
1931(昭和 6)年 2 月	長崎県は浦上川を準用河川として公示
1932(昭和 7)年 6 月	臨時県議会で長崎県による浦上川改修費の議決(第 2 期工事、3 箇年)

予算案は計 41.5 万円で、その年度の市一般会計当初予算 188 万 4,900 円の 22%に達した。5 年間の継続事業費の収支計画と年毎の事業計画は表-4,5 のようになるが、長崎市費については長崎市土木公債が発行され、

表-4 5 年間の継続事業費の収支計画

支 出		収 入	
土木費事務費	19,750 円	県費補助金(25%)	103,750 円
工事費	395,250	一般市費	311,250
合計	415,000	合計	415,000

工事費の主な内訳：用地買収費 107,600 円、家屋移転費等 21,520 円

表-5 5 ヶ年継続事業の年次計画

昭和(西暦)年度	金額 (円)
1928(昭和 3)年	40,000
1929(昭和 4)年	93,000
1930(昭和 5)年	94,000
1931(昭和 6)年	94,000
1932(昭和 7)年	94,000
計	415,000

表-6 浦上川改修に関する寄付

寄付者	金額(円)	寄付者	金額(円)
瓊浦 土地	14,952	三菱兵器製作所	6,847
赤瀬 保次	4,265	伊達木 仙一	1,661
山田 清	4,265	長崎電気軌道	2,623
森 伊三次	3,925	東合名会社	1,672
高太 治	6,925	長崎紡織	1,000
三菱長崎造船所	5,353	合計(11 件)	53,488

受益者の企業や個人から表-6 のように計 5 万 3,488 円(継続事業費の 13%)の寄付がなされた。長崎市による浦上川の河川改修は、表-7 のように浦上川およびその支川の改修と堤防改築、平地の湛水防止工事および城山町地内の変流工事からなる。梁橋から大橋までの 455m 区間の川幅が 22m から 33m に拡幅された。

表-7 浦上川の治水計画 (第 1 期工事)

(1)	区分	浦上川および同支流・下川の改修と堤防改築
	内容	本川約 1,855m、下ノ川約 545m、油木橋上流約 327m にわたり河川の屈曲を矯正し、川幅を拡張し、川床を掘削、または堤防を嵩上げ (川幅：梁橋から大橋までの 455m の川幅を 22m から 33m に拡幅) (堤防：馬踏 1 間半(約 2.7m)、高水位上 2 尺(約 60cm))
(2)	区分	岩川町、茂里町、坂本町付近における湛水防止工事
	内容	井樋ノ口付近一帯に流下する山間部の出水のうち、大学病院北川の谷、穴弘法付近の嶺から発する川、山王神社南側から発する川を圧力タンクに導水し、その圧力水を利用して、排水管で直接浦上川本流に放水
(3)	区分	城山町地内の変流工事
	内容	暗渠の付け替えおよび浦上川支流合流地点において河川を下流に向けて改修

長崎市議会は、浦上川の改修事業の議決と同時に、長崎県知事に宛てた「浦上川を県支弁編入に関する意見書」を採択した。表-3 に示したように長崎県議会⁴⁾でも「浦上川を準用河川に認定」の建議

が提出された。長崎県も浦上川から長崎港に流入する土砂により水深が浅くなっていることを認識していたが、県議会での議論が深まらずに、この建議は審議中止で議長預かりの結末となった。その後、1931(昭和 6)年に内務省から河川法を準用する河川として、県内の 16 河川を認可し、その中に浦上川も含まれたが、県支弁による改

表-8 浦上川の改修工事 (第 2 期、長崎県工事)

工事期間	1932(昭和 7)年～1934(昭和 9)年の 3 年間		
工事区間	2.301m(梁橋より上流の河川区間)		
事業費	総額	340,000 円	
	内訳 国庫補助(50%)	170,000 円	
	長崎県負担(10%)	34,000 円	
	長崎市負担(40%)	136,000 円	

修にするかどうかは決まっていなかった。1932(昭和 7)年の臨時県議会で長崎県による浦上川改修費の議決がなされ、1932(昭和 7)年から 1934(昭和 9)年の 3 年間の 34 万円の事業計画が表-8 のように認められた。長崎市による 5 年継続事業の最終年を引き継いだもので、浦上川の第 2 期改修工事に相当する。梁橋より下流域は港湾区間にあたるので、浦上川の改修工事は第 2 期改修工事をもって終了した。これらの河川改修によって、浦上川流域の水害は激減した。

5. 長崎豪雨災害

長崎豪雨によって浦上川流域も浸水被害を受け、浸水面積は 195ha、床上浸水は 2,241 棟、床下浸水は 1,393 棟に及んだ。浸水の原因は、河積あるいは暗渠断面積の不足、本川の水位上昇による排水不良、河道の屈曲、流出物による橋脚部の堰止めおよび上の地域からの浸入水であった。最大浸水深は国道 206 号沿いの浦上駅前で 2.0m であった。河川災害の特徴として、河川の平面形状が直角にカーブしたところや蛇行が厳しい箇所が多く、このため護岸の崩壊が多い。

災害復旧は、河道改修と浦上ダムの洪水調整機能を持つダムとしての改造で対応した。河道改修は、市街地のために河床掘削により対処するものとし、これで対処できない地区については一部拡幅した。河床掘削で、新たに石積み護岸の根元に根継工が施工された。下流の稲佐橋から大橋間の 2.8km を激甚災害対策特別緊急事業、大橋から三宝橋間と三川川を災害復旧助成事業で実施した。なお、この流域では洪水水位標が城山町に、長崎大水害慰霊供養塔等が上流の昭和 3 丁目に設置されている。

6. ふるさとの川モデル事業整備と「川に学ぼうかい in 浦上川(大橋地区)」の活動

浦上川の大橋町から茂里町地先の 1.4km の区間にふるさとの川モデル事業整備が実施された。この整備事業で、大橋地区に水辺空間が創出された。この大橋地区を活動の中心とする「川に学ぼうかい in 浦上川(大橋地区)」が 2006 年 8 月に結成され、2 ヶ月に一回定例の活動している。基本的には川の清掃活動であるが、川の生き物、浦上キリシタンの信仰、被爆護岸等の情報発信を発信し、浦上川の魅力を伝えている。

7. まとめ

本研究では、浦上川の中下流域の改修の歴史を調べたが、さらに上流域の歴史を調査する予定でいる。本研究は長崎大学工学部の創成プロジェクトの一環として実施したもので、課題を提供された長崎県河川課橋口茂氏(当時)をはじめ、「川に学ぼうかい in 浦上川(大橋地区)」のメンバーの皆様にお世話になったことを付記する。

参考文献

- 1) 新長崎市史編さん委員会:新長崎市史 第一巻自然編等、pp.24-27、同第二巻近世編、pp.176-179、pp.292-304、同第三巻近代編 p.133、pp.231-237、同第四巻現代編 pp.11-12、2012.3-2014.3
- 2) 長崎市役所:長崎市制 50 年史、pp.435-442、1939.11
- 3) 長崎市議会:長崎市議会史 記述編 第 2 巻、pp.707-749、1996.3
- 4) 長崎県議会史編纂委員会:長崎県議会史 第 4 巻、pp.222-223、pp.483-484、pp.728-729、pp.794-797、1967.3